

後代パーリ仏教の世界に与えた *Lokappadīpakasāra* の影響

—— *Cakkavāladīpanī*, *Lokasaṅṭhānajotaratanagaṅṭhī* における *Lokappadīpakasāra* の引用を中心として ——

CHAITONGDI Phrachatpong

1. はじめに

筆者は拙論 [2009a]¹⁾ [2009b]²⁾ において、11 世紀以降の体系的な世界観を説いたパーリ文献を詳査し、14 世紀頃のビルマの Medhankara 僧王によって述作された *Lokappadīpakasāra* 『世間灯明精要』(以下 Lps と略す) が、その代表的な文献であることを紹介した。本書は数多く写本として現存しており、宇宙論・世界観を説いた同種の後代パーリ文献に多大な影響を与えていることにも注目すべきである。たとえば、1520 年に著述された *Cakkavāladīpanī* (以下 Cak と略す) には、Lps からの引用がしばしば明示され、16 世紀以降に成立したとされる *Lokasaṅṭhānajotaratanagaṅṭhī* (以下 Lsg と略す) にも Lps と同様の記述が数多く見られる。本稿では、上記の 2 書における Lps の引用関係に焦点をあて、Lps が後代のパーリ世界観に与えた影響と、Lps の位置づけについて明らかにしたい。

2. Lps と Cak

Cak は、標題の意味通りに、輪囷山(鉄囷山)世界の解説である。本書の跋文から、著作年代は、旧暦年代 882 年、つまり西暦 1520 年であることと著者が、当時タイの北方に活躍していた Sirimaṅgala 長老であることが知られる。タイで成立した文献でありながら、後にスリランカにも伝わったのである³⁾。構成として 6 章から成る。すなわち、第 1 章「形のある輪囷山世界の解説」(*Cakkavāḷasarūpaniddeśa*)、第 2 章「山の解説」(*Pabbataniddeśa*)、第 3 章「水源の解説」(*Jalāsayaniddeśa*)、第 4 章「洲の解説」(*Dīpaniddeśa*)、第 5 章「地の解説」(*Bhūminiddeśa*)、第 6 章「雑論の分別」(*Pakiṅṅakavinicchaya*) である。本書の論述の最大の特徴は、引用の出典を明確に示していることである。その引用の典拠は、パーリ三蔵、註釈文献、復註釈書などの様々な南伝パーリ文献である。しかし、Cak すべての引用のうち、Lps への言及が 2 箇所、その引用は 30 箇所にもものほり、最も引用回

(174) 後代パーリ仏教の世界に与えた *Lokappadīpakasāra* の影響 (P. CHAITONGDI)

数が多い。Cak の中で、引用回数が最も多いのは、第 5 章であるが、Lps において最も引用されたのは、第 7 章「器世間の解説」(Okāsalokaniddesa) である。それは、Lps の第 7 章には、輪囷山世界について詳述しているからである。

また、拙論 [2009b: 47] にも指摘したように、Lps の記述には、独自の記述もあれば、先行する文献 (パーリ三蔵, 註釈文献, 復註釈書など) の引用も多くみられる。特に、Lps 第 7 章は、12 世紀頃に成立した *Jināḷankāra-ṭīkā* (以下 Jinṭ と略す) と密接な関係をもち、Jinṭ を思想的基盤にしている。Cak においても Jinṭ への言及や、引用などが Lps について多く見られる。このように Cak の著者が、Jinṭ をよく知っていることは明らかである。しかし、9 箇所引用において、Cak の著者は、Jinṭ を直接に引用せず、敢えて Lps を使用したのは、興味深いところである。その他、3 箇所引用においても、「ナーガセーナ長老 (Nāgasena), スーパーラカ賢者 (Suppārakapaṇḍita), ニミ王 (Nimirāja)」というキーワードがあるから、南伝パーリ文献を熟知した Cak の著者は、*Milindapañho* や *Jātaka* などという源泉資料を知らなかったはずはない。しかし、いずれの引用においても、意図的にそれを Lps からの引用として取り上げたということは、Cak の著者がいかに Lps を重要視しているかということを確認している。

3. Lps と Lsg

体系的に世界観を説いた後代パーリ文献のうち、Cak の他に、Lsg という文献が現存している。本書の著者や著作年代は不明であるが、一部の記述が Cak の引用であることと、現存している最古のクメール文字写本の書写年代が仏暦 2290 年、つまり西暦 1747 年であることから、本書の成立年代は、1520 年～1747 年の間であるとタイの学者によって指摘された⁴⁾。

Lsg は、5 章から構成されている。すなわち、第 1 章「劫の生起の解説」(Kappavutṭhānaniddesa), 第 2 章「輪囷山と須弥山の解説」(Cakkavālasineruvaṇṇanā), 第 3 章「洲と雪山の解説」(Dīpahimavantadīpanī), 第 4 章「月と太陽の解説」(Candasuriyadīpanī), 第 5 章「人間と神々などの趣」(Manussadevatādīgati) である。本書はかなり後代に成立したため、多くの記述が、それ以前に成立した南伝パーリ文献からの引用から成る。その出典を明確に示す場合もあるが、ほとんどは明示されていない。しかし、Lps の記述と対照すると、本書の多くの部分が Lps と密接に関係していることが分かる。

両文献を比較対照すると、Lsg 第 5 章における地獄説から雑論の項目まで、四

洲説とジャンプ洲説の順序を除いて、Lsg の章立ては、Lps 第 7 章の構成とほぼ一致している。これは、Lsg が Lps 第 7 章から影響を受けて成立し、Lsg の著者が、それを模範として、Lsg を著作したと推測できる。また、Lsg 第 5 章の大部分が散文で著作された地獄説 (*Nirayakathā*)、餓鬼界説 (*Petavisayakathā*)、畜生説 (*Tiracchānakathā*) の項目は、それぞれ、Lps の第 2 章「地獄趣の解説」(*Nirayagatiniddeśa*)、第 3 章「餓鬼趣の解説」(*Petagatiniddeśa*)、第 4 章「畜生趣の解説」(*Tiracchānagatiniddeśa*) の章立ての順序に対応している。文章の形式と内容の相違点から見れば、Lsg の記述は、Lps からの引用であるとは考えられないが、Lps から何らかの影響を受けてこのような項目の順序になったと考えられる。

また、Lsg 第 1 章における無数説 (*Asaṅkheyyakathā*)、劫説 (*Kappakathā*)、[世界の] 壊滅と成立説 (*Samvaṭṭavivattakathā*) と、Lsg 第 5 章における地獄説から雑論 (*Pakiṇṇakathā*) までの項目を除き、Lps と Lsg の多くの記述がほぼ共通していることが分かる。しかし、Lps 第 7 章の記述内容の多くは、上記に紹介した *JinT* 以外、*Sāratthadīpanī* (以下 *Sdp* と略す) と *Sārasaṅgaha* (以下 *Ss* と略す) という文献からの引用文でもある⁵⁾。また、更にそれらの引用文の源泉資料を遡れば、拙論 [2009b: 46] において指摘したように、それぞれに共通する記述内容は、長部、長部註、長部復註、相應部、相應部註、法集論註、『清浄道論』、仏種姓経註、経集註、『第一義宝函』という、より古いパーリ文献に由来するものである。したがって、Lsg におけるそれらの記述が Lps の引用であると直ちに断定するのは、早計であろう。

次に検討すべきことは、Lsg における共通の記述は、Lps から直接に引用されたものなのか、あるいはそれらの先行文献からも影響を受けたのかということである。Lps 第 7 章の多くの記述は、諸先行文献を参考にして述作されたのであるが、引用文には、削除・付加・改変された部分が数箇所見られ、また独自の編集方法という特徴もあるから、これを手がかりにして、それぞれの記述を相互に厳密に比較をすることによって、Lsg に与えた Lps の影響を更に検討してみた。

その結果、Lsg における、第 1 章の劫の消滅説 (*Kappavināsakathā*) と七太陽説 (*Sattasuriyakathā*) のほとんどの記述、第 2 章の輪囷山説 (*Cakkavālakathā*) の 8 割、須弥山説 (*Sinerukathā*) の 4 割、第 3 章の雪山説 (*Himavantakathā*) の 4 割、第 5 章の天界説 (*Saggakathā*) の 2 割の記述は、Lps 第 7 章を下敷きに行っていることが明らかになった。しかし、その第 1 章の記述、第 3 章の雪山説の記述には、*Sdp* と *Ss* の両書の要素が見られる。これは、Lsg の著者が *Sdp*、*Ss*、*Lps* を先行資料に

(176) 後代パーリ仏教の世界に与えた *Lokappadīpakasāra* の影響 (P. CHAITONGDI)

したことを明確に物語っている。しかし、Lsg に対し最も大きな影響を与えた先行文献は Lps である。

4. まとめ

以上の検討によって、体系的に世界観を説いた後代パーリ文献である Cak と Lsg に与えた Lps の影響は、次のようにまとめられる。

Lps が Cak と Lsg に多大な影響を与えた根拠として、Cak の記述における後代パーリ文献の引用のうち、Lps からの引用回数が最も多く見られることがあげられる。また、Cak の著者は、13 箇所引用の先行文献が現存していることを知りつつも、それを使用せず、意図的に Lps から引用したということも重要である。

また、Lps からの引用のうち、Cak と Lsg 両書に最も引用されたのは、Lps の第 7 章「器世間の解説」の記述である。更に、Lsg の章立ては、明らかに Lps の第 7 章の構成を模範としている。このことは、Lps 特にその第 7 章が、重要な位置づけにあることを示している。

-
- 1) CHAITONGDI Phrachatpong [2009a] 「*Lokappadīpakasāra* (世間灯明精要) の研究序」『印度學佛教學研究』58-1, 日本印度学仏教学会, pp.372-369. 2) CHAITONGDI Phrachatpong [2009b] 「*Lokappadīpakasāra* (世間灯明精要) の成立背景—第七章「器世間の解説」(Okāsalokaniddesa) を中心として—」『パーリ学仏教文化学』23, 名古屋: パーリ学仏教文化学会, pp.41-55. 3) その根拠として、コロンボ博物館では、本書のシンハラ文字写本の現存を確認した。Henry M. Gunasekera, *Catalogue of Pāli, Sinhalese, and Sanskrit Manuscripts in the Colombo Museum Library*, 1901, p.6. 4) Supapan Na Bangchang, *Vivatthanakan ngan khian bhasa bali nai prathet Thai* (The Development of Pali Literary Compositions in Thailand.), Bangkok: Mahamakutarajavidyalai Foundation, 1986, p.484. 5) CHAITONGDI Phrachatpong [2009b: 44-47].

(平成 22 年度井上円了記念研究助成金による研究成果の一部)

〈キーワード〉 世界観, 宇宙論, 後代パーリ仏教

(東洋大学大学院)